新種のダイオウグソクムシ化石「コミナトダイオウグソクムシ」

千葉県立中央博物館　地学研究科　加藤久佳

千葉県の地層から発見された２種と、埼玉県から見つかっていた１種のオオグソクムシ属の化石を研究し、千葉県産の１種をダイオウグソクムシのなかまの新種として、館外の研究者と共同で論文発表しました。

論文：Kato, H., Kurihara, Y. and T. Tokita (2016) New fossil record of the genus *Bathynomus*(Crustacea: Isopoda: Cirolanidae) from the middle and upper Miocene of central Japan, with description of a new supergiant species. Paleontological Research 20(2): 145-156.

●ダイオウグソクムシについて

近年、水族館の人気者になった深海生物のダイオウグソクムシは、地球上で最大のワラジムシ目 (等脚目) の甲殻類です。オオグソクムシ属は、西大西洋・西太平洋・インド洋などの熱帯～温帯に 18 種が知られていますが、オオグソクムシ (*Bathynomus doederleini*) をはじめ、成体で体長が 15ｃｍ以下の「大型種」と、ダイオウグソクムシ (*B. giganteus*) など、体長 17cm 以上、最大で 40cm 以上にもなる「超大型種」に分けられます。現在の日本近海にはオオグソクムシ１種が生息し、超大型種は知られていません。

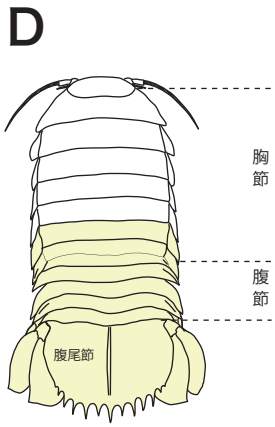
●発見の経緯は？

1）新種の化石は、鴨川市小湊 (当時、安房郡天津小湊町) 在住だった時田徹さんが、2002 年～2004 年頃、小湊や勝浦市大沢の海岸で化石の採集中に発見しました。見つかったのは天津層とよばれる地層で、約 800 万年前（新生代新第三紀中新世後期）の化石と考えられます。本種と見られる化石は十数点得られていますが、ダイオウグソクムシのなかま（オオグソクムシ属の超大型種）の化石が新種として記載されるのは世界で初めてです。発見者の時田さんは、発見当時、小湊の誕生寺の前で土産物屋を営んでいて、仕事の合間を見ては海岸に化石の調査に出かけていたことが新種の発見につながりました。時田さんは、中央博物館の市民研究員として現在も調査を続けています。

2）別のダイオウグソクムシのなかまの化石が、共同研究者の栗原行人さん (三重大学) によって、1993 年に埼玉県東松山市の根岸層（約 1250 万年前：新第三紀中新世中期）から採集されていました。推定体長 20ｃｍを超えるサイズと、付属肢の形態などから超大型種と考えられます。標本が１点しかなく、比較のための特徴が充分に残っていないことから、新種として記載はできませんでしたが、超大型種の化石としては世界最古の記録です。

●学名の意味は？

新種の学名は、*Bathynomus kominatoensis*（バチノムス・コミナトエンシス）としました。属名の *Bathynomus* は、Bathy = 深い・深海の、nomus (domus) = ラテン語の家・家人に由来し、種小名の *kominatoensis* は発見地の鴨川市小湊の地名をつけたものです。



A, B コミナトダイオウグソクムシ
Bathynomus kominatoensis Kato and Tokita, 2016

C　ダイオウグソクムシ類の１種
Bathynomus sp.
埼玉県東松山市産

化石として見つかる部位
（黄色の部分）

●見つかった化石について

オオグソクムシの仲間は、他の等脚類と同じく２段階の脱皮をします。まず、体の後半部分の殻を脱ぎ捨て、しばらくたってから前半部分を脱ぎます。化石で見つかるのは、ほとんどが後半部分の脱皮殻です (図 D)。今回の標本も、すべて後半部分の化石でした。残っている部分から推定すると、最大標本で体長は 24ｃｍ以上と見積もられます。

本研究の成果

1．現在日本近海には生息していない、ダイオウグソクムシのなかま（オオグソクムシ属の超大型種）の化石種が世界で初めて記載されました。
2．埼玉県産の化石は、ダイオウグソクムシのなかま（超大型種）の最古の化石記録になります。
3．これらの化石はオオグソクムシ属、とくにダイオウグソクムシなど超大型種の進化を考える際の重要な手がかりとなります。